「主体的な学び」の創造

変化の激しい今後の社会を担う児童生徒に必要な資質･能力を身に付けさせるためには，これまでの知識ベースの学びに加え，これからの社会を生き抜くために必要な資質・能力の育成を目指した「主体的な学び」の創造を目指す必要がある。「主体的な学び」を促す教育活動として，自ら課題を見付け，それをよりよく解決していく「課題発見・解決学習」を推進していく。

１　本県の児童生徒の学力の状況

広島県では，平成 14 年度から「基礎・基本」定着状況調査，広島県高等学校共通学力テストが始まり，各学校においては，児童生徒の学力向上に向けて，基礎・基本を徹底させるための学習が進められてきた。

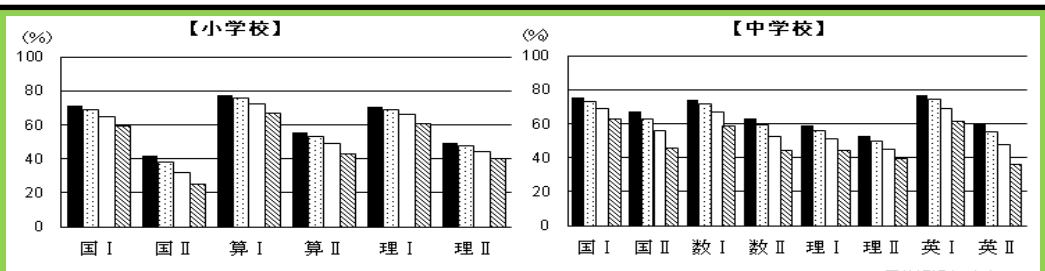
その結果，基礎的・基本的な内容の定着については，学力調査等において，一定の成果が表れてきている。一方で，平成 28 年度全国学力･学習状況調査の結果を見ると，主として「知識」に関する問題（A 問題）と比べ，主として「活用」に関する問題（B 問題）での平均正答率が低い。また，平成 28 年度「基礎・基本」定着状況調査の結果を見ると，小・中学校のタイプⅡにおいて，中学校国語以外の教科は，教科で学習した知識・技能を実生活や学習の様々な場面で活用する力に課題がある。

さらに，大学入試改革により，平成 32 年度から「大学入学希望者学力評価テスト」が導入される予定であり，思考のプロセスを記述式問題で問うなど，複数の知識を総合的に用いて回答することができる思考力，判断力が更に求められる傾向がある。

これまでの学びは，知識・技能の習得に重点が置かれ，その成果として，基礎的・基本的な学習内容はおおむね定着してきていると言える。しかし，教科で学習した知識・技能を実生活や学習の様々な場面に活用する力や，複数の資料を関連付けて読み取り，知識を活用して考え，自分の考えを論理的に表現することなどについては，引き続き課題がある。

次のグラフは，平成 28 年度「基礎・基本」定着状況調査において，総合的な学習の時間における探究的な学習と学力の相関関係を表したものである。

「総合的な学習の時間」では，自分で課題を立てて情報を集め整理して，調べたことを発表するなどの学習活動に取り組んでいます。



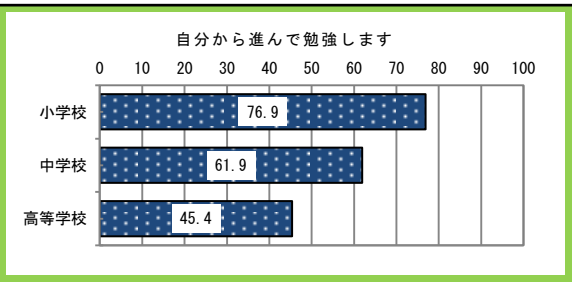
平均通過率 (%)

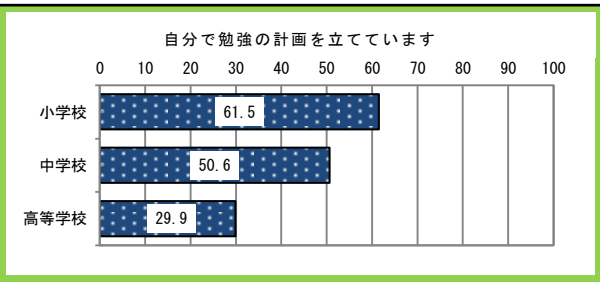
(27)	小学校						中学校							
	国Ⅰ	国Ⅱ	算Ⅰ	算Ⅱ	理Ⅰ	理Ⅱ	国Ⅰ	国Ⅱ	数Ⅰ	数Ⅱ	理Ⅰ	理Ⅱ	英Ⅰ	英Ⅱ
①よく	71.1	42.0	77.6	55.4	70.6	49.1	75.4	66.9	73.7	62.9	59.1	52.7	77.0	60.2
②やや	69.0	37.7	76.0	53.0	69.1	47.5	73.2	63.0	71.3	59.5	55.9	49.6	74.6	55.4
③あまり	64.9	32.0	72.2	49.1	65.8	44.5	69.1	55.7	66.8	52.7	50.9	45.2	69.1	47.6
④全く	59.5	24.8	66.5	42.8	60.7	40.0	62.6	45.4	58.2	44.4	43.9	39.2	61.0	36.3
①と④の差	11.6	17.2	11.1	12.6	9.9	9.1	12.8	21.5	15.5	18.5	15.2	13.5	16.0	23.9

小・中学校ともに，総合的な学習の時間において探究的な学習に取り組んでいる児童生徒ほど，教科調査における平均正答率が高い。また，タイプⅠよりタイプⅡの方が，質問紙調査の回答の状況による平均正答率の差が大きいという傾向があり，特に中学校国語，英語のタイプⅡにおいて，顕著な差が見られる。

次に，小学校，中学校，高等学校における児童生徒の学習意欲の状況についての調査結果を示す。校種別に比較すると，小学校，中学校，高等学校と上がるにつれて，肯定的な回答の割合が低下していることが分かる。

「学習意欲の状況」※肯定的な回答をした児童生徒の割合（%）





H28「基礎・基本」定着状況調査（小中），H28 広島県高等学校学力調査（高）
児童生徒質問紙調査の結果より

２　平成30年度「課題発見・解決学習」の全県展開に向けて

「平成 30 年度『課題発見・解決学習』の全県展開」とは，全ての学校で，これからの社会を生き抜くために必要な資質・能力の育成を目指した「主体的な学び」を促進するため，総合的な学習の時間を始め，各教科等の学習において「課題発見・解決学習」の取組の実践がされている状態である。平成 30 年度の全県展開に向けて，次のことに取り組むことが大切である。

○　学校教育目標を踏まえ，自校の児童生徒に育成を目指す資質・能力を設定すること
○　自校が設定した育成を目指す資質・能力の一つ一つについて，発達段階に応じた目指す児童生徒の具体的な姿を明確にすること
○　自校が設定した育成を目指す資質・能力を「どの教科等で」「いつ」育成すべきかについて構想すること
○　「課題発見・解決学習」の単元を開発し，次年度の年間指導計画へ位置付けること

平成 30 年度から実践するには，平成 29 年度中に，自校が設定した資質・能力を育てるために，年間指導計画をイメージしながら大まかな単元構想を立てることが大切である。例えば，小学校であれば担当学年の，中学校・高等学校であれば担当教科の，どのような単元で「課題発見・解決学習」を取り入れ，主体的な学びを促す学習活動を展開するのかを構想して，年間指導計画に位置付けること等が重要である。

日頃の授業においても，児童生徒に主体的な学びを促すような授業改善に取り組む必要がある。教師は，「課題発見・解決学習」の考え方を生かし，学習者基点の能動的な深い学びになるよう，授業研究や指導方法の工夫に取り組まなければならない。授業づくりのポイントとして「目標・内容・方法」の一体化を図ることが重要である。

次期学習指導要領においても，「何ができるようになるか」は目標に，「何を学ぶか」は内容に，「どのように学ぶか」は方法にそれぞれ対応しており，このことを踏まえて，授業改善をより一層進めることが大切である。

また，育成を目指す資質・能力を踏まえた評価の在り方について検討し，研究を進めておく必要がある。

参考：本誌　第１章　「具合的な施策展開」課題発見・解決学習の推進　Ｐ14

３　育成を目指す資質・能力について

「幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」（平成 28 年 12 月 21 日中央教育審議会）（平成 28 年，以下「答申」とする。）では，各教科等で身に付けていく力と教科横断的に身に付けていく力を相互に関連付けながら育成すべきであるとし，学習する子供の視点に立って育成を目指す資質・能力を三つの柱に整理している。

これら育成を目指す資質・能力の三つの柱は，学校教育法に示された学力の三要素（「知識・技能」，「思考力・判断力・表現力等」，「主体的に学習に取り組む態度」）とも大きく共通している。

本県において，「広島版『学びの変革』アクション・プラン」に示している児童生徒に育成を目指した資質・能力と三つの柱に基づく資質・能力を下表のように整理する。

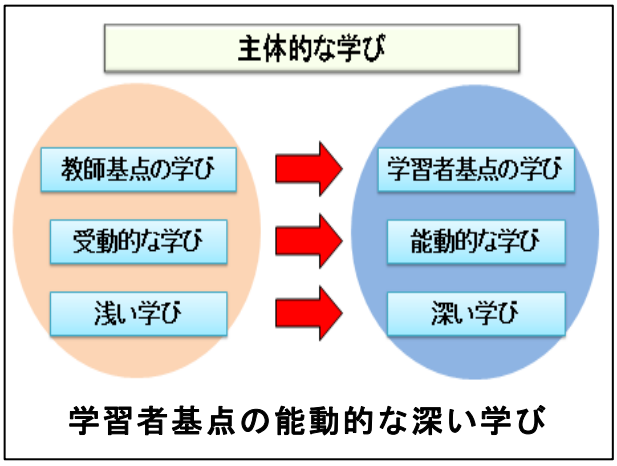
「広島版『学びの変革』アクション・プラン」（これからの社会で活躍するために必要な資質･能力〔コンピテンシー〕）	資質・能力の三つの柱 ※「答申」より	
知識 ・知識 ・情報　等	①「何を理解しているか，何ができるか(生きて働く『知識・技能』の習得)	・各教科等において習得する知識や技能であるが，個別の事実的な知識のみを指すものではなく，それらが相互に関連付けられ，さらに社会の中で生きて働く知識となるものを含む。
スキル ・課題発見・解決力 ・知識・情報活用能力 ・論理的・建設的批判能力 ・思考力・判断力・表現力 ・コミュニケーション能力 等	②「理解していること・できることをどう使うか（未知の状況にも対応できる『思考力・判断力・表現力等』の育成)」	・物事の中から問題を見いだし，その問題を定義し解決の方向性を決定し，解決方法を探して計画を立て，結果を予想しながら実行し，振り返って次の問題発見・解決につなげていく過程 ・精査した情報を基に自分の考えを形成し，文章や発話によって表現したり，目的や場面，状況等に応じて互いの考えを適切に伝え合い，多様な考えを理解したり，集団としての考えを形成したりしていく過程 ・思いや考えを基に構想し，意味や価値を創造していく過程
意欲・態度 ・協調性・柔軟性 ・主体性・積極性 ・回復力・耐える力 ・多様性に対する適応力 価値観・倫理観 ・自己理解・自らへの自信 ・異文化理解・共感力 ・アイデンティティー ・高い志・使命感　等	③「どのように社会･世界と関わり，よりよい人生を送るか（学びを人生や社会に生かそうとする『学びに向かう力，人間性等』の涵養)」	・主体的に学習に取り組む態度も含めた学びに向かう力や，自己の感情や行動を統制する能力，自らの思考の過程等を客観的に捉える力など，いわゆる「メタ認知」に関するもの。 ・多様性を尊重する態度と互いのよさを生かして協働する力，持続可能な社会づくりに向けた態度，リーダーシップ，チームワーク，感性，優しさや思いやりなど，人間性等に関するもの。

4　「主体的な学び」とは

これまで，知識量の多寡によって人の能力を判断する捉え方があった。しかし，今後ますます情報化が進む社会においては，知識量の多寡よりも，学習者自身が学んだ知識を相互に関連付け，構造化して，より深く理解し，学習後の異なる場面で活用することができるよう，知識の質を高めることが求められる。知識の質を高めることは，「社会を生き抜くために必要な資質・能力」を育成することにつながる。その育成を目指すために，「主体的な学び」を児童生徒が展開していくことが重要となっている。

「主体的な学び」とは，学習者基点の能動的な深い学びである。

「学習者基点の学び」とは，学習の全てを児童生徒に委ねるということではない。教師は，児童生徒をよく観察して，児童生徒の興味・関心，既有知識，経験，生活等を把握しなければならない。把握した内容を踏まえ，児童生徒の思いや願い，考えなどを大切にしながら，教科等の目標を達成させるために必要な学習内容や効果的な指導方法を取り入れ，学習活動を組み立てていくということである。



学習者基点の能動的な深い学び

「能動的な学び」とは，学習者が，単に活動していることをもって「能動的」とは言わない。学習形態を問わず，学習者が学習活動に自ら積極的に関与する学びでなければならない。

「深い学び」とは，単に知識の習得に留まらず，学んだ知識をつなげて新たな知識を生み出したり，新たな学びを展開したりするような学びである。これに対して，教師から学習者に向けて一方的に授けられただけの知識は長く脳裏に留まらない。このような知識を享受するだけの学びは「浅い学び」と言われる。

このような「主体的な学び」は，学習者自身が，学習活動を振り返り，自らの見方・考え方の高まりや学習の仕方を自覚的に捉え評価することによって，一層促されるものである。これにより，学習者は，更に学習意欲を高め，自らが授業での学びを予習や復習などにつなげていくというような自立的な学習を進めていくことになる。

この「主体的な学び」を促す教育活動の一つとして挙げられるのが，「課題発見・解決学習」である。

5　「課題発見・解決学習」の考え方

（１）「課題発見・解決学習」とは

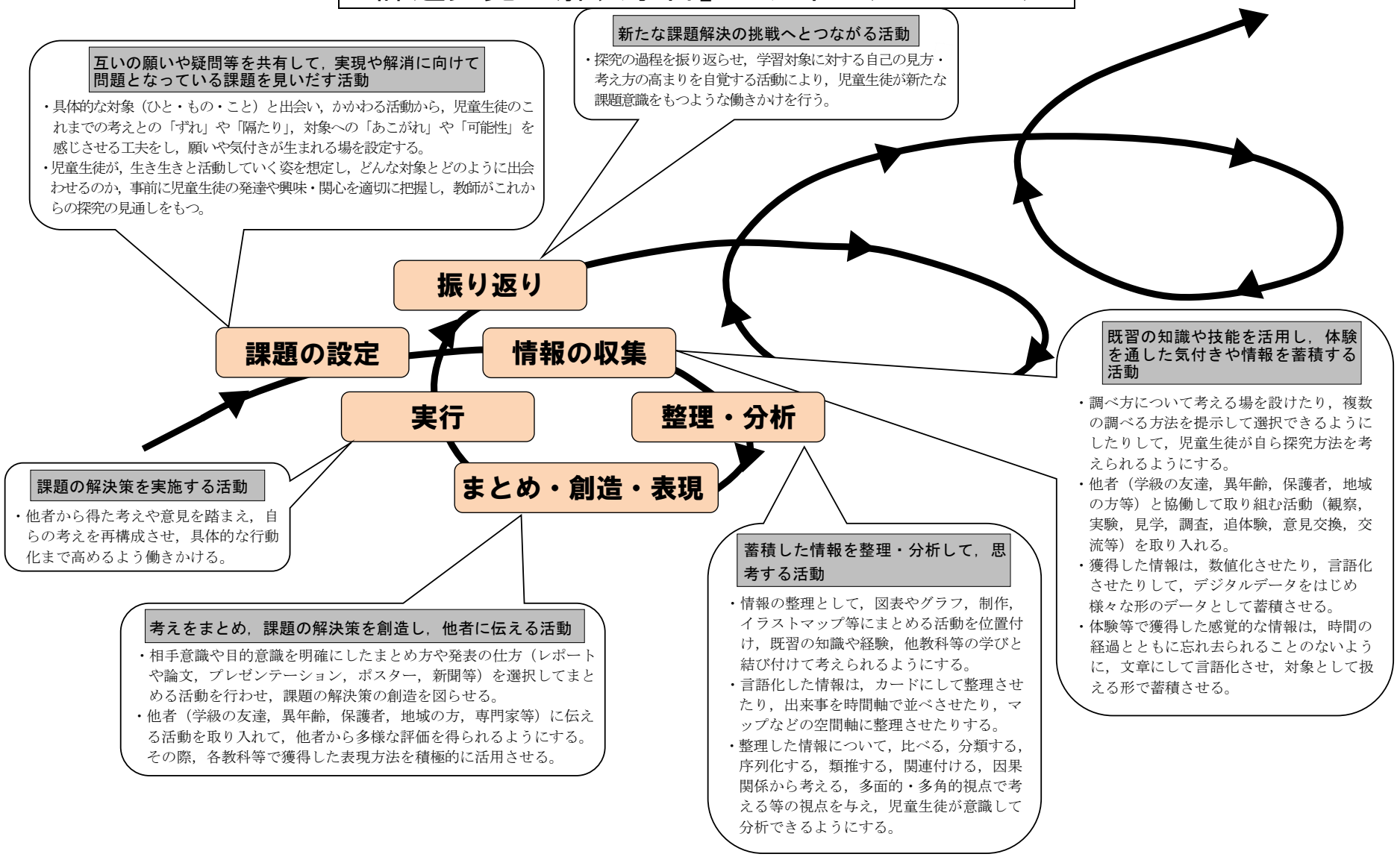
「課題発見・解決学習」とは，児童生徒が自ら課題を見付け，課題の解決に向けて探究的な活動をしていく学習である。

「課題発見・解決学習」には，次のような活動が考えられる。

〔課題の設定〕，〔情報の収集〕，〔整理・分析〕，〔まとめ・創造・表現〕，〔実行〕，〔振り返り〕など

これらは，いつも順序よく形式通りに繰り返されるわけではなく，順番が前後することもあるし，一つの活動の中に複数のプロセスが一体化して同時に行われる場合もある。また，この過程は，次のページの図に示すように何度も繰り返され，スパイラルに高まっていく。特に，充実を図ることが求められるのは，〔課題の設定〕，〔整理・分析〕，〔振り返り〕である。

「課題発見・解決学習」の過程（イメージ）



〔課題の設定〕は，児童生徒が自ら課題意識を持ち，その意識が連続発展することが大切である。しかし，児童生徒が自ら課題を持つことが大切だからといって，教師が何もしないでじっと待つ，あるいは，教師が一方的に「今日は，～について勉強します」と宣言するだけの課題の提示では，児童生徒の本時の学習に対する課題意識や学習への意欲は喚起されない。そこで意図的な働きかけをすることが大切である。事前に児童生徒の興味・関心等を適切に把握し，これまでの児童生徒の経験や既有の知識等との「ずれ」や「隔たり」を感じさせたり，対象への「あこがれ」や「可能性」を感じさせたりする工夫が必要である。児童生徒に「気になるな」という違和感や「何とかしたい」という必要感などを持たせることができれば，児童生徒自らの課題意識へとつなげ，「めあて」を持たせていくことができる。

〔整理・分析〕については，収集した情報をそのまま模造紙に書き写して発表するなど，児童生徒の思考，判断する場の不足が課題として指摘されてきた。こうした状況を改善するためには，収集した情報を比較したり，分類したり，因果関係を捉える等の視点を状況に応じて教師が児童生徒に示し，児童生徒の思考する活動を促すなどの取組が必要である。

〔振り返り〕については，「めあて」に対応した「まとめ」を行う際，できたか，できなかったかという結果だけでなく，「授業で習う内容は，こんな形で実社会とつながっている」，「自分たちで考えることは楽しい。もっと○○について調べてみたい」，「今回は○○が原因で失敗したので，次回は△△の視点からアプローチしてみよう」といった思いを児童生徒がもつことにより，新たな課題解決の挑戦へとつながり，主体的な学習を進められるようになる。

「課題発見・解決学習」を進めるに当たっては，活動自体が目的化したり，形式的に繰り返したりすることがないよう，留意することが大切である。

（２）「課題発見・解決学習」の現状

「基礎・基本」定着状況調査の結果によると，「課題発見・解決学習」に関わる全ての設問において，肯定的に回答している児童生徒は，否定的に回答している児童生徒に比べて，全ての教科で通過率が高い傾向があることが分かった。

例えば，「課題の設定」に関わる設問「授業では，解決しようとする課題について，『なぜだろう』，『やってみたい』と思います。」において，中学校国語，数学，英語のタイプⅡにおいて，「よく当てはまる」と回答した児童生徒と「全く当てはまらない」と回答した児童生徒の通過率の差は 20 ポイント以上となっている。

また，「課題発見・解決学習」に関わる児童生徒の意識と，学校の指導に対する意識にずれがあることが明らかになった。

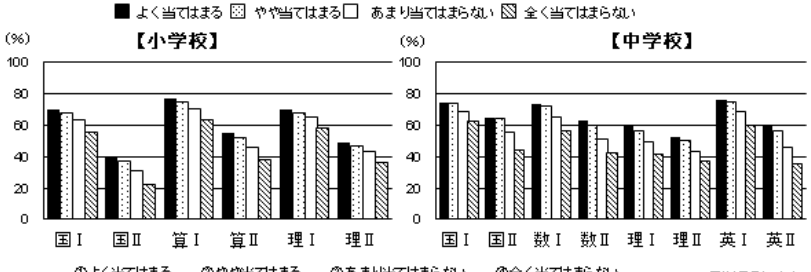
特に中学校においては，ほとんどの活動において 20 ポイント以上の意識の差が見られた。（「平成 28 年度 広島県 学力調査報告書」参照）

各学校においては，自校の児童生徒の意識をしっかり把握し，特に学校の指導に対する意識とのずれが大きい項目については，要因を考察するとともに，一層指導改善を進めていく必要がある。

平成 28 年度「基礎・基本」定着状況調査のタイプⅠとタイプⅡの結果の状況と児童生徒質問紙の「課題発見・解決学習」に関わる調査結果との関係

課題の設定

授業では，解決しようとする課題について，「なぜだろう」，「やってみたい」と思います。



①よく当てはまる　②やや当てはまる　③あまり当てはまらない　④全く当てはまらない

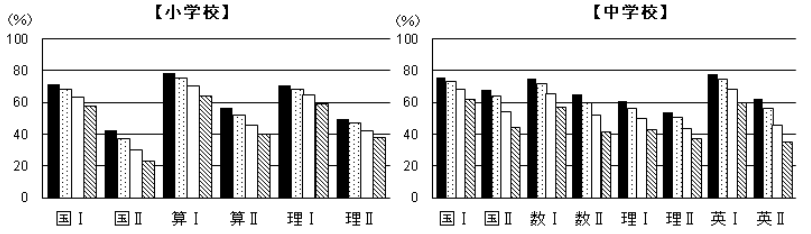
平均通過率 (%)

	小学校						中学校							
	国Ⅰ	国Ⅱ	算Ⅰ	算Ⅱ	理Ⅰ	理Ⅱ	国Ⅰ	国Ⅱ	数Ⅰ	数Ⅱ	理Ⅰ	理Ⅱ	英Ⅰ	英Ⅱ
①よく	70.4	40.0	77.2	55.2	70.2	48.9	74.4	64.9	73.8	63.0	59.6	52.8	76.5	59.6
②やや	68.4	37.1	75.4	52.5	68.3	47.0	73.8	64.2	72.2	60.4	56.7	50.7	75.1	56.8
③あまり	63.8	30.7	70.5	46.3	65.2	43.0	69.0	55.7	65.6	51.4	49.6	43.7	68.6	45.9
④全く	56.1	22.8	63.4	38.6	58.1	36.8	62.5	44.3	56.7	42.5	41.7	37.4	60.5	35.5
①と④の差	14.3	17.2	13.8	16.6	12.1	12.1	11.9	20.6	17.1	20.5	17.9	15.4	16.0	24.1

※各教科において平均通過率が一番高い数値を網掛けで示している。①と④の差が20ポイント以上あるものは太枠で囲っている。

整理・分析

授業では，情報を，比べたり（比較），仲間分けしたり（分類），関係を見付けたり（関係付け）して，何が分かるのかを考えています。

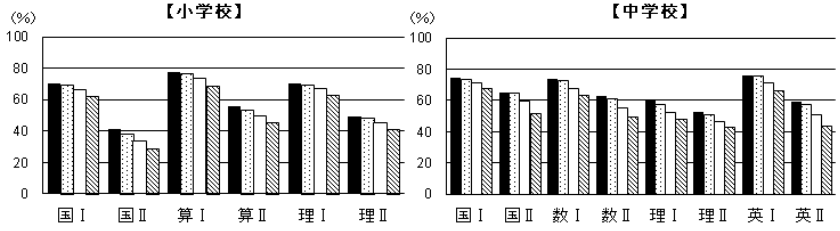


平均通過率 (%)

(18)	小学校						中学校							
	国Ⅰ	国Ⅱ	算Ⅰ	算Ⅱ	理Ⅰ	理Ⅱ	国Ⅰ	国Ⅱ	数Ⅰ	数Ⅱ	理Ⅰ	理Ⅱ	英Ⅰ	英Ⅱ
①よく	71.7	42.2	78.5	56.8	70.8	49.8	75.9	67.8	75.2	65.1	60.9	54.1	77.8	62.3
②やや	68.7	37.2	75.5	52.6	68.9	47.3	73.8	64.4	72.0	60.0	56.5	50.6	75.2	56.6
③あまり	63.1	29.9	70.2	46.0	64.5	42.4	68.5	54.2	65.6	51.8	49.7	43.7	68.5	45.8
④全く	57.7	23.1	64.4	40.6	59.1	38.6	62.1	44.4	57.2	42.0	42.9	37.8	60.4	35.0
①と④の差	14.0	19.1	14.1	16.2	11.7	11.2	13.8	23.4	18.0	23.1	18.0	16.3	17.4	27.3

情報の収集

授業では，課題を解決するための情報を集める前に，どのような方法だと必要な情報を集めることができるのかを考えています。

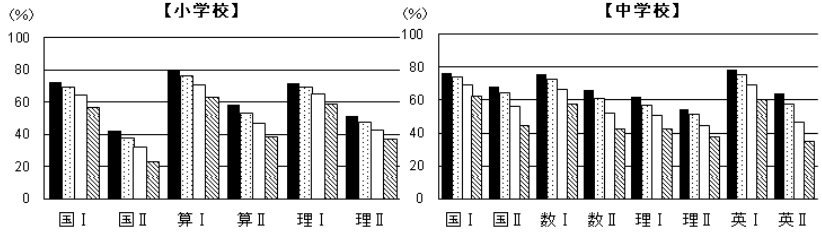


平均通過率 (%)

	小学校						中学校							
	国Ⅰ	国Ⅱ	算Ⅰ	算Ⅱ	理Ⅰ	理Ⅱ	国Ⅰ	国Ⅱ	数Ⅰ	数Ⅱ	理Ⅰ	理Ⅱ	英Ⅰ	英Ⅱ
①よく	70.8	41.6	77.4	55.5	70.5	49.3	74.5	64.8	73.7	63.1	59.8	53.0	76.2	59.5
②やや	69.3	38.3	76.1	53.5	69.2	47.8	73.7	64.5	72.7	61.2	57.2	50.8	75.5	57.5
③あまり	66.3	33.8	73.5	49.9	67.0	45.3	70.9	59.3	68.0	55.1	52.6	46.7	71.4	50.6
④全く	62.1	28.3	68.8	45.3	62.6	41.2	67.2	51.3	63.4	49.0	47.9	42.7	66.2	43.2
①と④の差	8.7	13.3	8.6	10.2	7.9	8.1	7.3	13.5	10.3	14.1	11.9	10.3	10.0	16.3

まとめ・創造・表現

授業では，自分の考えとその理由を明らかにして，相手に分かりやすく伝わるように発表を工夫しています。



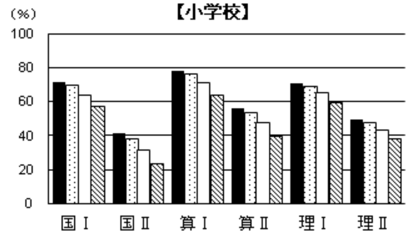
平均通過率 (%)

	小学校						中学校							
	国Ⅰ	国Ⅱ	算Ⅰ	算Ⅱ	理Ⅰ	理Ⅱ	国Ⅰ	国Ⅱ	数Ⅰ	数Ⅱ	理Ⅰ	理Ⅱ	英Ⅰ	英Ⅱ
①よく	72.5	42.5	79.3	58.2	71.8	51.3	76.6	68.2	76.0	66.2	61.7	54.7	78.7	63.9
②やや	69.2	38.0	76.4	53.2	69.3	47.7	74.1	64.6	72.7	61.3	57.4	51.2	75.8	57.8
③あまり	64.3	31.8	70.9	46.9	64.9	42.8	69.3	56.5	66.2	52.3	50.4	44.6	69.2	46.8
④全く	56.6	23.2	63.2	39.0	58.7	37.1	62.5	44.9	57.8	42.5	42.7	37.9	60.6	34.8
①と④の差	15.9	19.3	16.1	19.2	13.1	14.2	14.1	23.3	18.2	23.7	19.0	16.8	18.1	29.1

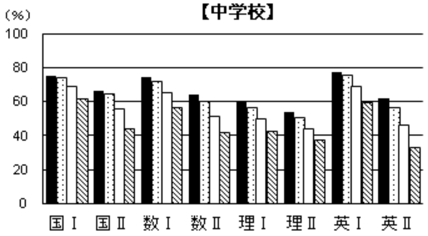
実行

授業では，考えたり提案したりしたことについて，実際に取り組んでいます。

【小学校】



【中学校】



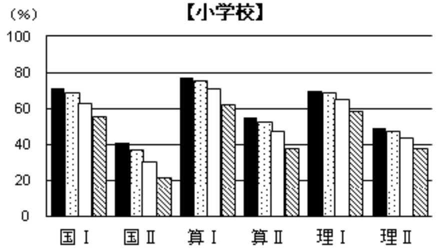
平均通過率（%）

	小学校						中学校							
	国Ⅰ	国Ⅱ	算Ⅰ	算Ⅱ	理Ⅰ	理Ⅱ	国Ⅰ	国Ⅱ	数Ⅰ	数Ⅱ	理Ⅰ	理Ⅱ	英Ⅰ	英Ⅱ
①よく	71.4	41.5	78.4	56.3	70.9	49.7	75.3	66.2	74.7	64.4	60.2	53.5	77.5	61.7
②やや	69.2	38.0	76.0	53.1	69.1	47.7	73.7	64.1	72.1	60.2	56.5	50.5	75.2	56.4
③あまり	64.0	31.4	71.1	47.4	65.1	43.1	68.9	55.5	65.6	51.5	49.9	44.1	68.5	46.3
④全く	56.9	23.2	63.5	39.8	59.2	38.0	61.7	43.6	56.6	42.0	42.1	37.0	59.4	33.2
①と④の差	14.5	18.3	14.9	16.5	11.7	11.7	13.6	22.6	18.1	22.4	18.1	16.5	18.1	28.5

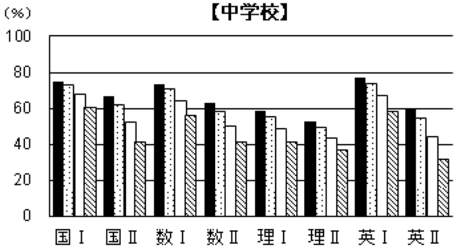
その他

授業では，友達と話し合うなどして，自分の考えを深めたり，広げたりしています。

【小学校】



【中学校】



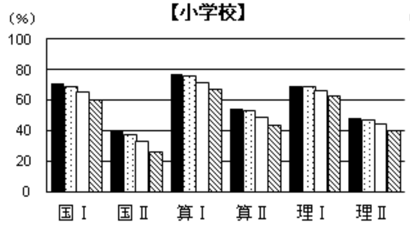
平均通過率（%）

	小学校						中学校							
	国Ⅰ	国Ⅱ	算Ⅰ	算Ⅱ	理Ⅰ	理Ⅱ	国Ⅰ	国Ⅱ	数Ⅰ	数Ⅱ	理Ⅰ	理Ⅱ	英Ⅰ	英Ⅱ
①よく	71.0	40.5	77.4	55.1	69.9	48.8	75.0	66.5	73.6	62.7	58.7	52.3	76.8	60.0
②やや	68.3	36.9	75.5	52.4	68.7	46.9	72.7	62.0	70.7	58.3	55.1	49.0	73.7	54.2
③あまり	62.8	30.2	70.4	46.9	64.8	43.1	67.4	52.4	64.3	50.0	48.9	43.2	67.0	43.8
④全く	55.0	21.1	62.2	37.7	58.4	37.6	60.3	41.2	55.6	41.2	40.8	36.8	57.8	31.4
①と④の差	16.0	19.4	15.2	17.4	11.5	11.2	14.7	25.3	18.0	21.5	17.9	15.5	19.0	28.6

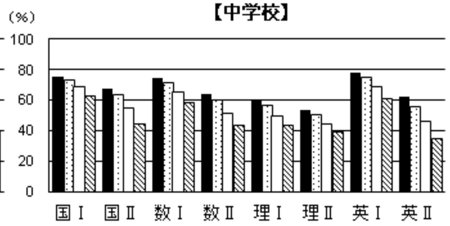
振り返り

学習の振り返りをするときには，「どこまで分かったか」，「学習の方法でうまくいったことや失敗したことなどの理由」を考えています。

【小学校】



【中学校】



平均通過率（%）

	小学校						中学校							
	国Ⅰ	国Ⅱ	算Ⅰ	算Ⅱ	理Ⅰ	理Ⅱ	国Ⅰ	国Ⅱ	数Ⅰ	数Ⅱ	理Ⅰ	理Ⅱ	英Ⅰ	英Ⅱ
①よく	70.7	40.6	77.5	54.5	69.5	48.5	75.7	67.8	74.9	64.0	60.4	53.5	77.9	62.2
②やや	68.7	37.2	75.7	53.1	69.0	47.4	73.4	63.9	71.9	60.2	56.3	50.2	75.0	56.0
③あまり	65.1	33.0	71.9	48.9	66.2	44.7	68.8	54.8	65.6	51.7	50.0	44.3	68.5	46.4
④全く	59.9	26.1	67.3	43.7	62.7	40.3	63.1	44.6	58.2	43.6	43.2	38.9	60.8	35.2
①と④の差	10.8	14.5	10.2	10.8	6.8	8.2	12.6	23.2	16.7	20.4	17.2	14.6	17.1	27.0

「課題発見・解決学習」に関わる児童生徒の意識と学校の指導に対する意識との関連

ここでは，児童生徒質問紙調査の「課題発見・解決学習」に関する質問事項に「よく当てはまる」，「やや当てはまる」と肯定的に回答した児童生徒の割合と，それらの質問事項に対応した学校質問紙調査の質問事項に「よく当てはまる」，「やや当てはまる」と肯定的に回答した学校の割合を示す。

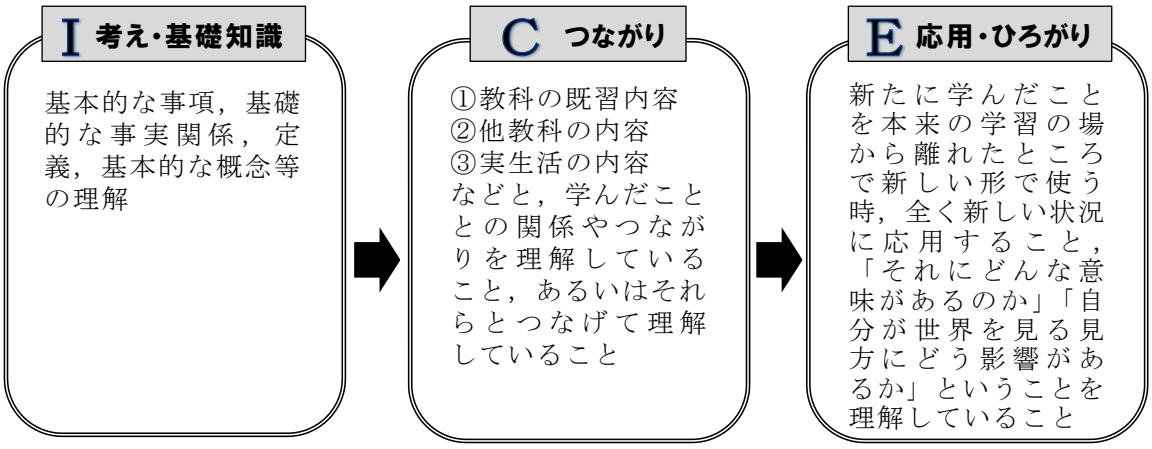
※児童生徒の肯定的な回答と学校の肯定的な回答の差が20ポイント以上あるものは網掛けで示している。　肯定的な回答の割合（%）

活動	質問事項	小学校 児童	小学校 学校	小学校 差	中学校 生徒	中学校 学校	中学校 差
課題の設定	(13) 授業では，解決しようとする課題について，「なぜだろう」，「やってみたい」と思います。	79.6	93.8	-14.2	65.5	90.0	-24.5
	(14) 授業では，解決しようとする課題について，「たぶんこうではないか」，「こうすればできるのではないか」と予想しています。	83.9	98.4	-14.5	71.8	97.5	-25.7
情報の収集	(15) 授業では，課題を解決するために，進んで，資料を集めたり取材をしたりしています。	50.8	87.1	-36.3	38.3	77.7	-39.4
	(16) 授業では，課題を解決するための情報を集める前に，どのような方法だと必要な情報を集めることができるのかを考えています。	59.9	87.3	-27.4	46.4	79.3	-32.9
整理・分析	(17) 授業では，調べたことなどを，図，グラフ，表などにまとめています。	69.9	91.5	-21.6	49.1	88.0	-38.9
	(18) 授業では，情報を，比べたり（比較），仲間分けしたり（分類），関係を見付けたり（関係付け）して，何が分かるのかを考えています。	74.2	86.1	-11.9	63.2	88.8	-25.6
まとめ・創造・表現	(19) 授業では，自分の考えを積極的に伝えています。	63.1	99.4	-36.3	56.3	98.4	-42.1
	(20) 授業では，自分の考えとその理由を明らかにして，相手に分かりやすく伝わるように発表を工夫しています。	67.0	98.5	-31.5	56.6	96.7	-40.1
実行	(21) 授業では，考えたり提案したりしたことについて，実際に取り組んでいます。	70.3	88.8	-18.5	63.3	82.7	-19.4
	(22) 学習の振り返りをするときには，「どこまで分かったか」，「学習の方法でうまくいったことや失敗したことなどの理由」を考えています。	70.6	78.8	-8.2	63.0	88.1	-25.1
振り返り	(23) 学習の振り返りをするときには，「もっと考えてみたいこと」，「もっと調べてみたいこと」，「もっと工夫してみたいこと」などを考えています。	74.1	84.4	-10.3	55.4	77.3	-21.9
その他	(24) ふだんの生活や学習の中で，これまでに学習した内容や学習の進め方を使っています。	80.5	92.3	-11.8	71.3	91.8	-20.5
	(25) 授業では，友達と話し合うなどして，自分の考えを深めたり，広げたりしています。	78.4	97.9	-19.5	74.5	98.4	-23.9
	(26) 授業では，実際にものを使ってやってみたり，地域や自然の中で学習したりするなどの体験活動をしています。	67.5	94.0	-26.5	54.2	79.3	-25.1
総合	(27) 「総合的な学習の時間」では，自分で課題を立てて情報を集め整理して，調べたことを発表するなどの学習活動に取り組んでいます。	67.5	89.6	-22.1	64.5	88.8	-24.3

（３）「課題発見・解決学習」の質的高まり

「課題発見・解決学習」の質をより高め，学びを「主体的な学び」にしていくためには，基礎的・基本的な知識・技能に留まるのではなく，それらをつなげ，いろいろな場面で活用できる知識・技能に高め，それらを統合して新たな価値を創造していく必要がある。

その過程を捉えるための一例として，Sue Fostaty Young・Robert J. Wilson（2013）のＩＣＥモデルがある。「考え・基礎知識（Ideas）」，「つながり（Connections）」，「応用・ひろがり（Extensions）」といったように，学びの質の高まりを重視し，その変容を捉えることができるものである。



それぞれの段階の活動で使用される「動詞」の例を次に示す。

考え・基礎知識	定義する，記述する，説明する，暗記する，計算する，反復する 等
つながり	比較する，分類する，推論する，差別化する，統合する 等
応用・ひろがり	発明する，創造する，提案する 等

これらの動詞は，異なる認知プロセスを示すので，学びの深さもそれぞれの段階によって異なることが分かる。

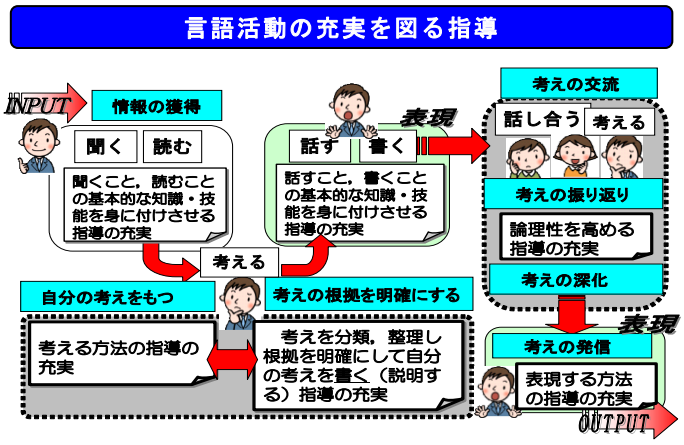
例えば，中学校音楽科で，「大地讃頌」を教材として扱う題材では，次のように考えられる。

考え・基礎知識…合唱曲「大地讃頌」の音楽を形づくっている要素を知覚・感受し，国語科や社会科との関連を図って，歌詞の内容や楽曲の背景等を理解している。また，音楽表現を創意工夫するための技能を身に付けて歌っている。
つながり……「大地」や「平和」などをテーマにした楽曲を比較して聴き，曲想や歌詞に込められた思いなど音楽の特徴について，共通点や相違点を捉える。また，他教科との関連を図り，「大地」や「平和」をテーマにした文学作品や美術作品に込められた思いを捉え，自らの「大地」や「平和」への思いを深める。これらを統合し，自分たちなりの「大地讃頌」の音楽表現を創意工夫する。
応用・ひろがり……合唱曲「大地讃頌」で身に付けた力を活用するとともに，自分たちの地域の自然などへの思いを込めて，地域をテーマにした合唱曲をつくり，地域の方を招いて音楽発表会を行い，作品を披露する。また，その作品の歌詞に込めた思いなどを地域の広報紙で紹介する。

このように「考え・基礎知識」から「応用・ひろがり」までを教師がイメージし，児童生徒にもこれらを示すことにより，「課題発見・解決学習」の質をより高めていくことが期待できる。

（４）「課題発見・解決学習」において求められるもの

ア　言語活動の充実



知識・技能を習得するのも，これらを活用し課題を解決するために思考し，判断し，表現するのも，全て言語によって行われるものであり，これらの学習活動の基盤となるのは，言語に関する能力である。したがって,「課題発見・解決学習」を推進していくためには，言語に関する能力の育成を重視し，各教科等において言語活動の充実を図ることが大切である。

（ア）育てたい力の明確化

各教科等の授業に言語活動を設定する場合，児童生徒にどのような力を育てたいのか，教師が目的を明確にすることが大切である。

現行学習指導要領では，国語科だけでなく，全ての教科等において言語活動の充実を図ることが求められているが，このことは，言語活動を充実すること自体を目的としているのではない。言語活動を効果的に設定することにより，児童生徒に，基礎的・基本的な知識及び技能を習得させ，これらを活用して課題を解決するために必要な思考力，判断力，表現力等を育み，教科等の目標を実現することが目的である。

県教育委員会では,「言語活動を通して育てたい力」を明確にした指導事例を作成し，各学校が研修等で活用できるよう，ホームページに掲載している。

参考ＨＰ：ホットライン教育ひろしま
「ことばの教育県づくりの推進」―「言語活動の充実」に関する指導資料―

（イ）目指す児童生徒像の共有化

言語活動の充実を図った教科等の授業を実施することによって，どのような児童生徒の姿を目指すのか，校内の全ての教員がイメージを共有することが大切である。

例えば,「自分の考えを持ち，根拠を明確にし，自分のことばで適切に表現することができる児童生徒」というような児童生徒の姿を設定することで，指導の目的が共通理解され，効果が高まる。

さらに，校内でイメージが共有できたら，担当している学年や教科等においても，指導後の児童生徒の姿を設定すると一層効果的である。

イ　体験的な学習の充実

現行の小学校学習指導要領総則には，体験的な学習を重視することが示されている。

小学校学習指導要領 第１章 総則

（第４の２（２））

各教科等の指導に当たっては，体験的な学習や基礎的・基本的な知識及び技能を活用した問題解決的な学習を重視するとともに，児童の興味・関心を生かし，自主的，自発的な学習が促されるよう工夫すること。

※ 中学校，特別支援学校小学部・中学部も同様

また，小学校学習指導要領解説総合的な学習の時間編には，「児童が身体全体で対象に働きかけ実感をもってかかわっていく活動が体験活動である。」と述べられている。さらに，人々や社会，自然と関わる体験活動を通して，自分と向き合い，他者に共感したり社会の一員であることを実感したりすること，自然の偉大さや美しさに出会ったり，文化・芸術に触れたり，社会事象への関心を高め問題を発見したり，友達との信頼関係を築いて物事を考えたりなどして，喜びや充実感を実感することができると述べられている。

体験的な学習は，単に何かをやってみるということではなく，教科等の目標の実現を目的として行われなければならない。また，調べたことをまとめ，発表するだけではなく，自分達が考えたことを更にに実行するところまで活動を進めたい。例えば，地域産業の振興策を児童生徒が様々に考えて提案し，それを実行してみるといった，児童生徒の主体性を引き出す活動である。

「広島版『学びの変革』アクション・プラン」でも，「実社会との繋がりを重視した体験的な学び」を重視している。「体験的な学習」は，「課題発見・解決学習」を推進する上で求められるものの一つと言える。

ウ　知識・技能を活用する学習活動の充実

総合的な学習の時間を始め，各教科等の学習において「課題発見・解決学習」を推進するためには，教科等の指導の中で，基礎的・基本的な知識・技能の習得とともに，現在でも取り組まれている「観察・実験の後その結果をもとにレポートを作成する」「文章や資料を読んだ上で知識や経験に照らして自分の考えを論述する」などの知識・技能を活用する学習活動の充実を図ることが大切である。

知識・技能を活用する学習活動を行う際，「活用の学習活動を行うためには，まず基礎的・基本的な知識・技能を習得させなければできない」「学習につまずきが大きい児童生徒には，活用の学習活動をさせるのは無理であろう」「知識・技能の習得は，習得の学習活動の中で，思考力・判断力・表現力の育成は，活用の学習活動の中で行う」等といった誤った捉えがされている現状もしばしば見受けられるので，留意する必要がある。

「習得」や「活用」の学習と「探究」の学習は，決して一つの方向に進むだけではなく，例えば，知識・技能の「活用」や「探究」がその「習得」を促進するなど，相互に関連し合って確かな学力（基礎的・基本的な知識・技能，思

考力・判断力・表現力，学習意欲）を伸ばしていくものである。

また，学習につまずきの大きい児童生徒は，暗記や反復を嫌う傾向があり，知識・技能の習得・定着が進まないが，「活用」や「探究」の学習の過程で，学習意欲が高まり，その児童生徒の過去の体験や既有の知識と結び付いて学習が進むことがある。知識・技能の習得・定着には，反復・練習というドリル学習も大切であるが，それればかりではなく，教科等における「活用」の学習や「探究」の学習において，知識・技能を活用する多くの体験をさせることによって，知識・技能の定着が強化され，一層確かなものとなる。

エ　協働的な学習の充実

変化の激しい今後の社会では，多様な他者と協働できる力を有する人材が求められている。「協働」とは，「他者と関わることにより，異なった価値観や考え方に触れ，自らの考えを広げたり深めたりしながら，他者と考えを共有し，共に行動に移すこと」である。

現在，総合的な学習の時間や各教科等において，協働的な学習が行われているが，注意すべきことは，協働的な学習を単なるグループ学習と混同しないことである。協働的な学習は，活発にグループで話し合う授業とイメージされやすいが，重要なことは，一人一人のものの見方や経験等に基づいた異なる価値観や考え方を互いに尊重しつつ，児童生徒が話し合うことによって多様な考え等に触れもっとよい考えがあることに気付いたり，他者の考え等を吟味することで自らの考えを深めたりするプロセスを大切にすることである。また，これらを通して，話し合うことの意義や必要性を児童生徒に実感させることも大切である。

〔話合い〕のきっかけとなる質問の例

I　考え・基礎知識	C　つ な が り	E　応用・ひろがり
＿＿＿のリストをあげなさい	＿＿＿は＿＿＿にどのような影響をもたらしますか？	＿＿＿を予測しなさい
主な＿＿＿を述べなさい	＿＿＿を推定しなさい	＿＿＿に対する解決を提案しなさい
＿＿＿の文から例をあげなさい	ほかにどのような方法がありますか？	＿＿＿が持つ意味は何ですか？
＿＿＿をほかの言葉で言い換えなさい	＿＿＿にはどのような価値がありますか？	あなたの意見では＿＿＿？
＿＿＿とはだれですか？	＿＿＿と＿＿＿の関係を説明しなさい	＿＿＿から何を学びましたか？
＿＿＿が起こったのはいつですか？	＿＿＿は＿＿＿とどのような点で似ていますか？	
＿＿＿によると，＿＿＿はどんな様子でしたか？	＿＿＿と＿＿＿を比較しなさい	
	自分の経験から例を取って，＿＿＿に当てはめなさい	

（Sue Fostaty Young・Robert J.Wilson「『主体的な学び』につなげる評価と学習方法」－カナダで実践される ICE モデル－　東信堂　P26，平成 25 年より）

また，例えば，P106 で述べたＩＣＥモデルに基づいて，教師が適切な場面で児童生徒に「話合い」のきっかけとなる質問をすることで，協働的に学ぶ際の学習の質を高めることが期待できる。

（５）「課題発見・解決学習」の評価

ア　学習の過程における質の変容を捉える評価の重要性

小学校学習指導要領総則第４の２(11)には，評価について右のように示されており，児童生徒一人一人の学習の成立を促すための評価という視点を一層重視する必要がある。評価に当たっては，児童生徒の実態に応じた多様な学習を促すことを通して，主体的な学習の仕方が身に付くように配慮するとともに，児童生徒の学習意欲を喚起するようにすることが大切である。その際には，学習の成果だけではなく，学習の過程を一層重視する必要がある。

小学校学習指導要領　第１章　総則
（第４の２（11））
児童のよい点や進歩の状況などを積極的に評価するとともに，指導の過程や成果を評価し，指導の改善を行い学習意欲の向上に生かすようにすること。

※ 中学校，高等学校，特別支援学校小学部・中学部・高等部も同様

この「学習の過程を一層重視する」とは，学習の過程における学びの質の変容を確実に捉えることである。これにより，教師は，現時点で児童生徒がどのような状況にあり，児童生徒の成長を促すためにどのように指導すればよいかを具体的に考えるようになり，児童生徒の学びを深める指導を目指すことができるようになる。

イ　学習の質を高めるための評価

「課題発見・解決学習」の質をより高めていくためには，表面的な知識を身に付ける「浅い学び」で終わるのではなく，学んだ知識をつなげて新たなものに展開させていく「深い学び」に変えていく必要がある。

そのためには，「考え・基礎知識」，「つながり」，「応用・ひろがり」と，知識をつなぎ，表面的なものから深い知識へと学びが深まる過程を評価することが必要である。

教科学習にこの評価法を用いる場合，質的な変容・高まりを特に求めたい学習場面において，ふさわしい「問い」（学んだことに独自の意味を見いだすことを要求するような課題）を設定する必要があり，評価する際には，設定した評価規準に「考え・基礎知識」，「つながり」，「応用・ひろがり」という段階をイメージしておくことが大切である。

また，児童生徒にはあらかじめこれらの段階を示し，児童生徒自身が学んだことをつなげてどこまで深めて考えていく必要があるのかを意識させることが必要である。

こうした質的な高まりの段階を教師が踏まえることにより，児童生徒の学びの質を高めるためにどのような問いを発したらよいのか，どのような学習活動がふさわしいのかという指導の工夫について，具体的に描けるようになる。

ウ　評価について

「答申」には，観点別評価については，小・中・高等学校の各教科を通じて，「知識・技能」，「思考・判断・表現」，「主体的に学習に取り組む態度」の３観点に整理するこ

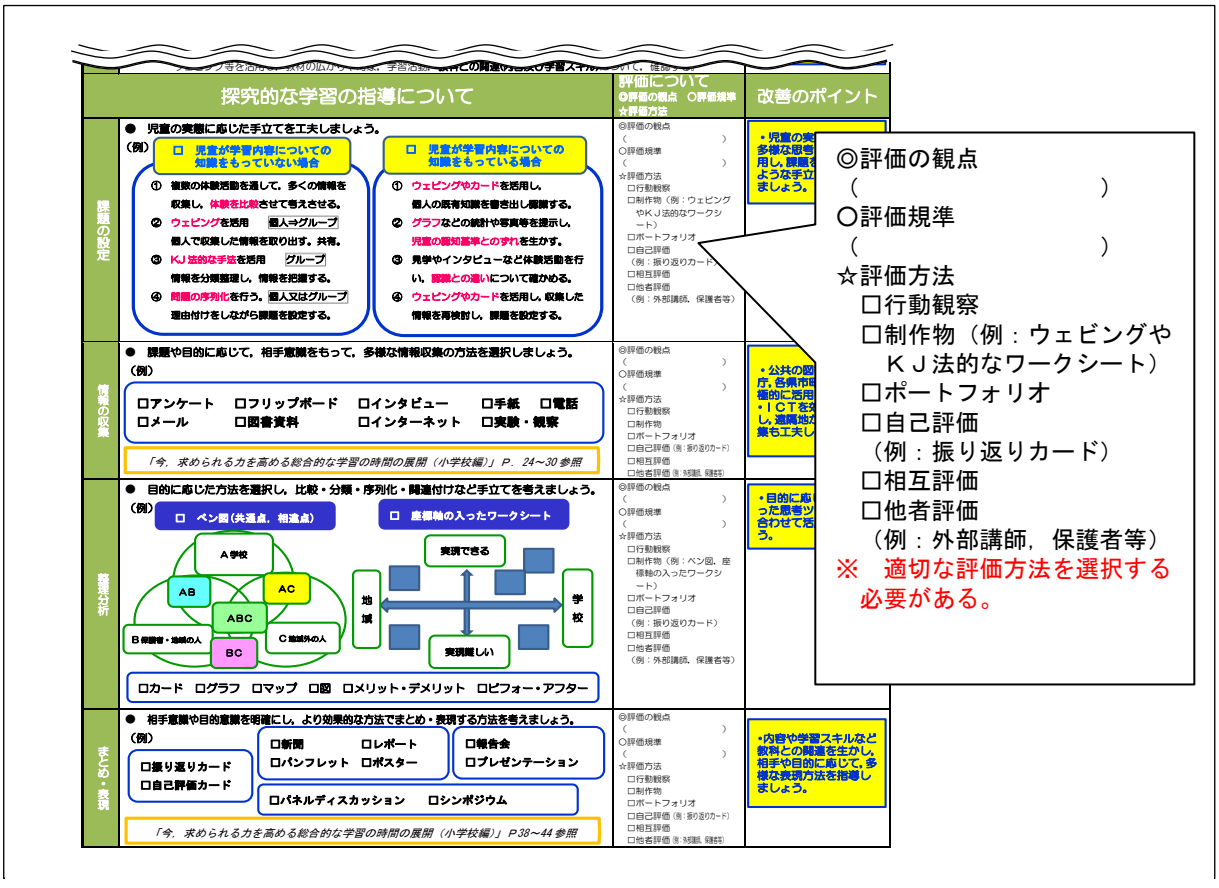
ととし，「主体的に学習に取り組む態度」の評価に関して，学習前の診断的評価のみで判断したり，挙手の回数やノートの取り方などの形式的な活動で評価したりするものではないことを示している。子供たちが自ら学習の目標を持ち，進め方を見直しながら学習を進め，その過程を評価して新たな学習につなげるといった，学習に関する自己調整を行いながら，粘り強く知識・技能を獲得したり思考・判断・表現しようとしたりしているかどうかという，意思的な側面を捉えて評価することが求められている。

また，資質・能力のバランスのとれた学習評価を行っていくためには，指導と評価の一体化を図る中で，論述やレポートの作成，発表，グループでの話合い，作品の制作等といった多様な活動に取り組ませるパフォーマンス評価などを取り入れ，ペーパーテストの結果にとどまらない，多面的・多角的な評価を行っていくことが必要である。さらには，総括的な評価のみならず，一人一人の学びの多様性に応じて，学習の過程における形成的な評価を行い，子供たちの資質・能力がどのように伸びているかを，例えば，日々の記録やポートフォリオなどを通じて，子供たち自身が把握できるようにしていくことも考えられることが示されている。

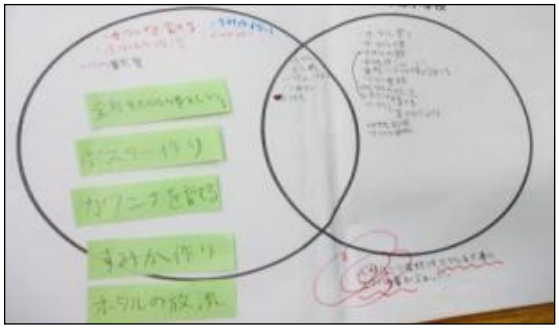
広島県立教育センター（平成 25・26 年度共同研究「総合的な学習の時間における探究的な学習の指導と評価の在り方」）は，総合的な学習の時間の評価の例として，「単元改善シート」に，以下のような評価方法を提案している。

今後，指定校においても実践的な研究を進め，教科のねらいに即して適切に評価できる方法を提案していく予定である。

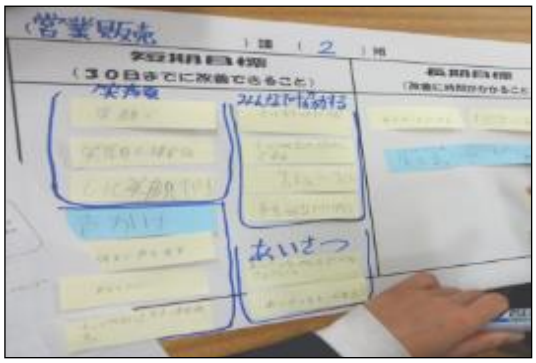
＜総合的な学習の時間における評価方法の参考例＞小学校 単元改善シート（一部抜粋）



ウェビング



ベン図



マトリクス

広島県立教育センター研究紀要第 42 号（平成 27 年３月）より

６　「課題発見・解決学習」の事例

授業において，教師が一方的に「今日は～について勉強します。」と宣言し，めあてを提示するといった形では，児童生徒の学習に対する課題意識や学習への意欲は喚起されない。「課題発見・解決学習」では，これまでの児童生徒の経験や既有の知識等との「ずれ」や「隔たり」を感じさせたり，対象への「あこがれ」や「可能性」を感じさせたりする工夫を行うことにより，児童生徒に課題意識をもたせ，めあてを設定していくことが求められる。

しかし，全ての教科等で毎時間，児童生徒に課題意識をもたせるところから学習活動を展開できるとは限らない。「課題の設定」，「情報の収集」，「整理・分析」，「まとめ・創造・表現」，「実行」，「振り返り」という「課題発見・解決学習」の過程において，それぞれどのような学習を設定するのか，単元全体を見据えて考えることが大切である。

以下に，「課題発見・解決学習」を取り入れた単元（題材）全体の具体的な流れ（例）を示す。（平成28年度「『学びの変革』パイロット校事業の指定校における実践より」

また，Ｐ120からの「○○科の事例」では，「課題発見・解決学習」を進める授業の事例として，「単元（題材）計画」又は，「単元（題材）計画・（単元（題材）中の授業の）学習指導案」の形を示している。